

フレッシュトーク

自分の夢と
今できること。敦賀 琴美 (高74回)
桐朋学園大学2年

●つるが・ことみ
松本市出身。趣味は神社
仏閣巡りとおいしい納豆
巻きを探すこと。特に酢
飯のお酢がしっくりとき
き、納豆がひきわり納豆
である納豆巻きがお気に
入り。だが、納豆ご飯は
苦手。



私は「世界で活躍するホルン奏者」になる夢に向かい現在、桐朋学園大学に通っている。大学を卒業してもホルン奏者になれる保証はなく、必要最低限の生活を送るための収入を得ることが出来る保証もなく不安である。だが、「音楽家」という道へ進もうと思った理由が2つある。

一つ目は、中学時代に感動する演奏に出会えたことだ。私がホルンを始めたきっかけは、吹奏楽部に入部したことである。入部した当時、楽器初心者の方はほとんど音を出すことも出来ず、楽譜さえも読むことが難しかった。

バル（現セイジ・オザワ松本フェスティバル）メンバーであった大野総一郎先生に出会い、私の夢である「世界で活躍するホルン奏者」のきっかけをいただいた。

大野先生は、50年ほど前に単身でドイツへ留学し、音楽大学を卒業。その後、ドイツのオーケストラに就職された。私は、大野先生のレッスンを受ける度に、「世界」が日本だけでなく地球という広い世界に着目するようになった。また、「スランプは貯金」、何をやっても結果が追いつかない時はある。だがそれは、無駄な時間なのでなく、いずれ花開くための必要な時間なのだと教えられた。大野先生に会う度に、ホルンが好きになり、もっと技術を向上させ、様々な文化で生活してきた人達と共にもっと演奏をしたくなる。

今年の春、ドイツのホルンセミナーへ行く機会を得られドイツへ2週間行ってきた。ドイツでは「もっと息を入れて」と肺活量の注意が促された。また、ほとんどドイツ語が理解できず、悔しい思いを何度もし、まだまだ「世界で活躍するホルン奏者」の道は遠いことをさらに実感させられた。楽器屋さんでは、クラシックを鼻歌で歌っている人がおり、日常生活に音楽が溶け込んでいることを感じられた。「この環境で生活したい」と目標が明確になり、より一層、精進していかなくてはと思う

た。そんな中、周りの同期は大会出場メンバーに抜擢され、曲中で吹ける場面が多くなっていた。それに對し、私はほとんどが吹き真似という状況にとっても引け目を感じ、何度も部活を辞めることを考えた。だが、負けず嫌いな性格の私は、「絶対に上手になりたい」という思いで部活を続け、日々の練習を努力したつもりだ。毎日、学校の少しの休み時間も、部活が終わって帰宅後も練習した。

その甲斐があり、中学2年で出場した中部日本個人コンテストでは県代表の1人として本大会へ進むことができ、入部してからずっと嫌だったホルンが2年がかりでようやく好きになった。その後、部員一丸の練習の積み重ねにより中学最後の吹奏楽コンクールで、息がぴつたりと合い、部員の心が一つにまとまり、練習してきた以上の演奏が本番で生まれた。まさに神がかった演奏であった。演奏中に、身体中がゾクゾクとした感覚を覚えた。その感覚が忘れられず、「奏でる楽しさ」を知ると共に「ホルン奏者になりたい」と考えるきっかけとなった。

二つ目は、恩師との出会いだ。中学2年の時に毎年、木曽町で行われている「山本真ホルンboot camp」に参加した。そのゲストで元フランクフルト放送交響楽団の首席ホルン奏者（ドイツ）、サイトウ・キネン・フェスティ

された。

昨年の11月より、私は飯田市で「飯田ホルン会」を発足した。中高生を中心に月4回ほど練習を行っている。この団体を立ち上げたのは、音楽やホルンを好きになってもらうことはもちろんだ



飯田ホルン会の練習風景。左端が筆者。
伊那谷文化祭に向けて練習中（2024年7月）

が、部活動時間の減少されている今、子供たちが何か学生時代に打ち込んだと思えることができ、それが今後の人生を生きていく糧になればいいと考えたからだ。私自身、中学時代に必死に部活動に取り組んだことにより、そこから「努力は必ず報われる」「スランプは貯金」を体験でき、今に生かされている。つまりことは日常的にある。だが、受験などの困難なことはそれを思い出して頑張れた。学生時代だからこそ熱中できること、若いからこその出来ることがたくさんある。新しいことへのチャレンジをやってみようと私はホルンを通じて伝えたい。